海と神話をつなぐ

志賀島プロジェクト2018

九州大学ソーシャルアートラボ　　助成：日本財団「海と日本PROJECT」

photo by AT

ごあいさつ

「海と神話をつなぐ〜志賀島プロジェクト2018」では、8月から12月までの間に、レクチャーを4回、ワークショップを5回、そしてシアター作品の公演を行ってきました。福岡在住の我々にとっては非常に身近な場所である志賀島に関して、その深さについて多くのことを学び、色々なことがゆったりとした時間の流れの中でつながっていることを実感できました。海での録音には、多くの子どもさんたちにも受講生として参加いただきました。水中録音という若干工学的な行為で得られた素材が、アートを通して表現のために昇華していく過程を感じていただける機会になったとすれば嬉しく思います。九州大学ソーシャルアートラボでは初となる、外部の財団からの助成による事業でした。多くの方にご支援いただき、またご指導いただきながらの取り組みとなりました。改めて心より御礼申し上げます。

九州大学大学院芸術工学研究院教授・ソーシャルアートラボ ラボ長　尾本 章

photo by AT

海と神話をつなぐ試み〜志賀島プロジェクト2018

博多湾に浮かぶ志賀島。「神の島」、「祈りの島」とも称されるこの海の聖地は、古代の記憶がぎっしりと蓄積され、海と人とのつながりのなかでさまざまな神話を生みだす母体となってきました。九州大学ソーシャルアートラボでは、その志賀島をテーマに日本財団の「海と日本PROJECT」の助成を受けて「志賀島プロジェクト2018」を実施してきました。

「志賀島を知り、志賀島を体験し、志賀島を表現する」という三つの柱を軸に、学びの場として「志賀島自由大学」を開講し、2018年8月から12月にかけて3期にわたりレクチャーやワークショップ、舞台作品の上演といったカリキュラムを展開してきました。とくに、志賀島に鎮座する志賀海神社に関わり、この「海神(わたつみ)」の総本宮に刻まれた歴史性を現代に引き寄せる数々の試みを実践してきました。たとえば、志賀島にゆかりの深い「安曇磯良(あずみのいそら)」という神を呼び出す呪文から生まれたといわれる神楽歌の歌唱ワークショップや大潮の日の干潮時の沖津宮への海割れ参拝は、志賀島の神話的な世界がわれわれの身体のなかに刻み込まれるような体験の場となりました。また、子どもたちを対象とした水中マイクによる海中レコーディングのワークショップでは、われわれの知らない海中の迫力ある音の世界が耳の中で広がっていったのです。

そして、本プロジェクトの最後のプログラムとして舞台作品「冬至にうたう阿知女作法〜ISOLA2018」が上演されました。ステージのフロアに志賀島の地図と潮の干満の映像をダイレクトに映し出すという実験的な演出によって、志賀島そのものがヴァーチャルな舞台装置になったのです。その舞台のうえで唱えられる神楽歌「阿知女作法」は、「安曇磯良」の神話を現代によみがえらせ、まさに「海と神話をつなぐ」舞台となりました。この記録集のなかでも、さまざまな画像を通じて、その舞台作品の一端が紹介されています。

「志賀島プロジェクト2018」の実施にあたり、二回にわたって講座を担当していただいた志賀海神社・権禰宜の平澤憲子氏の多大なるご助力に対して感謝の念にたえません。また、志賀島ふたば幼稚園、志賀島自治連合会、福岡市漁業協同組合志賀島支所、志賀商工会、福岡市博物館、荘厳寺など、多くの関係機関の方々にもご協力をいただきました。ここに深く御礼を申し上げます。

日本財団の「海と日本PROJECT」の助成によって実施された「志賀島プロジェクト2018」の活動を通じて、海の魅力や海の叡智をより多くの方々に伝えることができたとしたら、それは、われわれの大きな喜びです。このプロジェクトに参加していただいた方々をはじめ、関係者のみなさま、ほんとうにありがとうございました。

九州大学大学院芸術工学研究院教授
ソーシャルアートラボ「志賀島プロジェクト」総合ディレクター
藤枝 守

志賀島プロジェクト年間イベント一覧

志賀島自由大学 1期	8月25日：レクチャー1	水産学者が読み解く記紀神話〜和邇・鰐の正体〜
	9月 9日：レクチャー2	阿知女作法と阿曇族
	9月 9日：ワークショップ1	阿知女作法をうたう〜沖津宮・海割れ参拝
志賀島自由大学 2期	10月27日：レクチャー3	聖地としての志賀島〜志賀海神社権禰宜、平澤(阿曇)憲子氏が語る祈りの島〜
	11月11日：ワークショップ2	海を聴く〜海中録音にチャレンジ
	11月17日：ワークショップ3	古代の塩作り
	11月17日：レクチャー4	海と考古学〜玄界灘をめぐる人々〜
	11月24日：ワークショップ4	志賀島の古層にふれる〜仏閣めぐり〜
志賀島自由大学 3期	12月22日：シアター作品公演	冬至にうたう阿知女作法〜ISOLA2018〜
	12月23日：音響展示	干珠満珠
	12月23日：子どもワークショップ	海を体で表現しよう

冬至にうたう阿知女作法　ISOLA2018
2018年12月22日（冬至）
九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟ホール

photo by YH

創作ノート「冬至、干満、阿知女、ISOLA」　藤枝 守

2015年に二つのバージョンによる現代神楽「甕の音なひ」を制作しました。その3月の公演は、九州大学大橋キャンパス・多次元実験棟ホールにて上演され、12月には博多・住吉神社の能楽殿が舞台となったのです。この二つのバージョンでは、焼酎が生産される過程における「発酵」の響きが重要な役割を担っていました。

発酵の現場となる醪(もろみ)のなかで躍動する微生物の生の軌跡を響きとして捉えてみる。そして、その響きを「音なひ」というカミの発する声に見立て、そのかすかな声がざわめく醪を湛えた「甕」にじっと聴き入る。このような甕のなかで響く発酵の音がもとになって「甕の音なひ」という舞台が着想されました。そのとき、醪を生命の宿る海とみなしてみると、その海のなかを泳ぐ阿度部磯良(あどめのいそら)の姿が浮かび上がってきたのです。じっさいの舞台においても、その磯良を海から呼び出すという設定のなかで、宮中に伝わる『御神楽』のなかの《阿知女作法》という神楽歌を唱える必要性を感じたのです。そして、石川高さんに相談しながら、一気に「甕の音なひ」の舞台の具体化が進みました。「志賀島プロジェクト2018」の一環として上演された「冬至にうたう阿知女作法」という舞台作品は、《阿知女作法》が唱えられたこの「甕の音なひ」の続編として構想されたのです。

「アチメ、オウ、オウ」と繰り返される《阿知女作法》。この神楽歌は、磯良を呼び出す呪文に基づいているといわれています。その呼び出す舞台となったのが志賀島の突端の勝馬だといわれています。この地で七日七晩にわたって、磯良を呼び出すために歌や踊りが続き、それが神楽の発祥だったという説もあります。そして、「志賀島プロジェクト2018」の最後のプログラムとして、「冬至にうたう阿知女作法〜ISOLA2018〜」で締め括ることになりました。

その公演日となった12月22日が偶然、冬至にあたることがわかり、冬至のもつ意味が深くこの舞台作品に関わることになったのです。古代では、冬至が1年の始まりとして、また、生と死との境目として位置づけられています。また、冬至の日に昇ってくる日の出は古代の人々にとって特別の存在でした。じつは、志賀島・勝馬にある沖津宮を起点として、この冬至の日の出の方向にラインを延ばしてみると、ほぼ、その線上に箱崎宮や宇美八幡宮、竈門(かまど)神社など、いくつかの神社が並びます。まさに、冬至における日の出の方向のなかに列を成して神々がつながるのです。

9月8日に志賀海神社にて「長月にうたう阿知女作法」と題した奉納演奏が執り行われました。その奉納演奏に引き続いて冬至の日に多次元実験棟ホールにて、ふたたび《阿知女作法》を唱えることになったのですが、志賀島から離れた場のなかで、どのように《阿知女作法》を唱えたらいいのか模索が続きました。そのとき、多次元ホールを志賀島に見立てるための手立てが必要に思われたのです。まず、葉脈のように絡み合う志賀島の等高線の地図の画像をステージのフロアに映し出し、そのうえに沖津宮周辺の潮が干満する磯辺の映像を重ねてみました。つまり、この舞台作品の演目は、神座をもつ志賀島の特異な空間にもとづきながら、潮の干満という時間的なプロセスのなかで進行していくのです。また、神功皇后にまつわる伝説も舞台に重要な意味づけを与えています。この伝説では、龍宮にて干珠満珠の二つの珠を磯良が受け取り、皇后に渡したとあります。この霊力のある二つの珠は、「干満」という海の周期の象徴とも考えられ、また、潮についての古代の海人(あま)の知恵を意味したものだともいえるでしょう。

今回の舞台では、さらに、知足美加子氏による舞台美術が意味を重層化させていきます。冬至のラインは、塩によってくっきりと浮かび上がり、地図上の志賀島の沖津宮のポイントには、アクリルの円柱がランドマークのように置かれ、そのなかには、塩、朝倉の杉粉、山桜の粉が積層されています。このような海、船、そして山を象徴する三つの素材が内包された造形とともに、砂嘴(海の中道)を「橋懸かり」に見立てた多次元実験棟ホールの舞台は、志賀島の相似形に変換されたのです。まさに、志賀島という仮想の舞台のうえで、潮が干満する海の波動がホール全体を満たし、そして、「阿知女作法」や「千歳法」という志賀島にゆかりの深い神楽歌が唱えられ、さらには、万葉集の「月読」や「藻塩」を歌った《植物文様琴歌集》が織り込まれた1時間余りの神話的な時間となったのです。

イタリア語で「島」を意味する「ISOLA」は、また、暗闇のなかで身体を海水に浮べたときのような感覚をもたらす装置である「isolation tank」を連想させます。長らく海のなかにいた磯良(ISOLA)は、光の届かない海水のなかで変性意識の状態にあったのかもしれません。まさに、離脱した海の環境から呼び出された磯良。そのときに、牡蠣や海藻などが付着した顔を隠すために磯良は、自ら白布でおおったといわれていますが、そのおおわれた磯良の顔の表情は、潮が引いたときの磯そのものの表面にもみえてきます。まさに、磯良は、海の精霊の化身であり、さまざまな海の神話を生みだす母体として、そこに志賀島そのものが写し出されているようです。

なお、この公演の前後には、舞台となった九州大学大橋キャンパスに程近い熊野道祖神社の神職による「清め祓い」の神事も合わせて執り行いました。

志賀海神社奉納

長月にうたう阿知女作法
2018年9月8日
志賀海神社・本殿

主催：実行委員会「あずみの杜」
共催：志賀海神社、志賀島文化協会

冬至にうたう阿知女作法　ISOLA2018プログラム

熊野道祖神社神職による清め祓い

第一場　干満 + 入場

第二場　阿知女
神楽歌「阿知女作法」
植物文様第4集:pattern A
《植物文様ハープ曲集》から

第三場　中入り
雅楽古典曲「太食調 合歓塩」
・月読〜海原(2014)
・藻塩二歌「め刈り」「山にたなびく」(2018、初演)
《植物文様琴歌集》から

第四場　千歳
神楽歌「千歳法」
「笙・笛・琴・声」奏上

第五場　退場

【芸術監督・作曲】
藤枝守

【出演】石川高 (声・笙)
中村理恵 (竪琴)
山中すなお (声)
渡辺融 (土笛)
磯部久子、比屋根綾子 (シンギング・ボール)

アフタートーク
「阿知女作法とイソラをめぐって」
【出演】石川高(雅楽家)
綾杉るな(神社古代史研究家)
池田美奈子
知足美加子
藤枝守〜進行

「神楽歌」について　石川高

■神楽歌「阿知女作法（あぢめさほう）」

宮廷に千年を越えて伝承されてきた、神楽歌の一曲です。「阿知女作法」は、海の神「阿度部磯良(あどめのいそら)」に呼びかける歌であり、安曇氏の系統の神遊びであると、折口信夫は解釈しています。この志賀島に発祥する藝能が、海人と深い繋がりをもつ八幡信仰の趨勢と共に都へともたらされ、宮廷の神楽歌の儀式のなかに取り入れられて、永く伝えられてきたことになります。「太平記」や「八幡愚童訓(はちまんぐどうくん)」には、「阿度部磯良と神功皇后の神話」が記されています。

神功皇后は、神託に従い、軍勢を率き連れて新羅へと渡るに際し、神々を召し集め、その助けを得ることにしました。一柱、阿度部磯良だけは、海底深くおこもりになって、姿を現しません。そこで神々は、歌という歌を尽くし、幾度も繰返してうたいました。すると、磯良はその美しい響きに耐えかねて、海の上に現れます。その姿を観た神々は驚きました。たくさんの海の生物に覆われ、もはや人の形を成してはいなかったからです。海に棲むもの達は磯良を慕い、皆一体となって暮らしていたのでした。この磯良が舵取となり、龍神から借りた乾珠、満珠を携え、神功皇后の船は新羅へと渡って、大勝利を収めたのでした。

本歌　あぢめ　お　お　お　お　お
末歌　おけ　あぢめ　お　お　お　お
本歌　おけ

■神楽歌「千歳（せんざい）」

神楽歌の古い写本には、「千歳法(せんざい の ほう　しかさへづる声」とあり、この曲は、志賀島の海人が唱える「囀(さえづり)」であると、折口信夫は解釈しています。

平安時代に書かれた「讃岐典侍日記(さぬきのすけにっき)」には、鳥羽天皇が即位した年の「清暑堂御神楽(せいしょどうのみかぐら)」の様子が記されています。その中に、「本末(もとすえ)の拍子の音や、あんなに大きく高い堂内いっぱいに響きあう声は、音楽のことなどあまり知らない耳にも素晴しいと思われる。御神楽がようやく終りのほうになって、　せんざい　せんざい　万ざい　万ざい　と歌うのこそ、あまりのおめでたさに、天照大御神が、岩戸のなかにこもっていらっしゃれなかったのも、ごもっともと思われる。」とあります。この瞬間を永遠へと変える、咒法の歌でしょうか。

本歌　せんざい　せんざい　せんざいや　ちとせの　せんざいや
末歌　まんざい　まんざい　まんざいや　よろづよの　まんざいや
本歌　なを　せんざい
末歌　なを　まんざい

「植物文様琴歌集」について　藤枝守

植物の電位変化のデータによる「植物文様」では、和琴と声による「琴歌」というあらたなシリーズが展開しています。古事記や万葉集、神楽歌などの古代のテキストにより、和琴の弾き語りを想定していますが、その和琴の代わりとして、ゴシックハープ(竪琴)のバージョンでも演奏が可能です。

今回は、「阿知女作法」と「千歳法」の二つの神楽歌の場面のあいだの「中入り」において、「月読」と「藻塩」による三つの琴歌が演奏されます。《琴歌集～月読三歌》のひとつ「海原」は、万葉集のテキストに基づいています。今回、初演される《藻塩二歌》の「め刈り」と「山にたなびく」も同じく万葉集からのテキストですが、いずれも志賀島の海人による藻塩づくりを歌ったもので、この二つの歌は、志賀島の歌碑にもなっています。また、この《藻塩二歌》は、志賀島・沖津宮近くの海藻(あおさ)の電位変化のデータにもとづいています。

「月読～海原」　海原の　道遠みかも　月読の　光少なき　夜は更けにつつ　(巻七　1075)
「藻塩～め刈り」　志賀の海人は　め刈り塩焼き暇なみ　くしらの小櫛　取りも見なくに　(巻三　278)
「藻塩～山にたなびく」　志賀の海人の　塩焼く煙風を疾み　立ちは上らず　山にたなびく　(巻七　1246)

遊ぶこと　石川高

「遊ぶこと、本当に遊ぶことのできるのは神だけである。人が遊ぶときは、神とともに遊ぶ。」これは、白川静先生の「文字講話Ⅲ（平凡社ライブラリー）」のなかの言葉です。古より、私達日本人にとって、音楽を演奏し聴くことは、神聖な遊びであったと思います。今宵は、私達の内奥の深く遠い記憶に耳を傾けたいと思います。

神楽歌は、千年におよぶ伝承の歴史をもち、永いあいだ秘されてきました。私は雅楽の師から神楽歌を習いましたが、師は、このように美しい歌が在ることを広く知ってもらいたい、と考え、神楽歌をはじめとする雅楽の歌謡講座を作りました。私がこの講座を引継いでから、二十年が経ちます。ひとつのことを永く続けていると、それは自然に祈りになってゆきます。

千年前の人々と心を分かちあいながら歌を楽しむことは、貴重な体験だと思います。そして、藤枝守作品と、古くから伝わる歌とが、互いを照らす瞬間に立ち会うことを楽しみにしています。

（公演プログラムより転載）

photo by AT

photo by AT

photo by AT

photo by AT

photo by AT

芸術監督・作曲・音響展示：藤枝守　演出協力：石川高
美術：知足美加子　音響：須藤力（モルグ社）
音響システム：九州大学尾本研究室
映像制作：渡辺圭介（anno lab）
映像システム：九州大学石井研究室　舞台イメージ：藤匠汰郎
広報：池田美奈子
舞台構成・舞台監督・運営協力：株式会社アルカディア
制作：九州大学ソーシャルアートラボ

石川高（声・笙）
1990年より笙の演奏活動をはじめ、国内、世界中の音楽祭に出演。雅楽団体「伶楽舎」に所属。笙の独奏者としても、様々な音楽家、作曲家と共に活動してきた。藤枝守作品も数多く演奏している。毎年、九州大学にて集中講義を行い、朝日カルチャーセンター新宿にて「古代歌謡」講座を担当 している。今年9月には、志賀海神社にて奉納演奏を、また「海と神話をつなぐ～志賀島プロジェクト 2018」にて、レクチャーとワークショップ を行った。　http://radiant-osc.com/

中村理恵 (竪琴)
歴史的に最も古い楽器のひとつで、古代より癒しの音楽、「薬」としても用いられてきたハープ。その豊かな倍音(波動とも言われる)と「天使の歌声」とも称される純粋な音色に魅せられ、教会、ホスピス、蔵、カフェ、棚田、船上、様々な場所で演奏している。クラシックの美しい響きと、ジャズ特有の豊かな和声をハープの音色に織り込む試みを続けながら、「和み」の音楽を模索中。佐賀県在住。HP「猫と癒しの音色さがし」

山中すなお (声)
声楽を、大庭尋子氏、橋本エリ子氏、持松朋世氏、Cornelia Horak氏に師事。官民協働海外留学支援制度である「トビタテ!JAPAN日本」代表に採用され、1年間オーストリア・ウィーンにて研鑽を積む。ウィーン夏期国際音楽ゼミナールにてディプロマを取得。第70回全日本学生音楽コンクール北九州大会声楽部門大学の部本選入選。現在、福岡教育大学芸術課程音楽コース卒業。

渡辺融 (土笛)
社会福祉法人「明日へ向かって」音楽活動ディレクター。九州大学芸術工学府芸術工学院修士課程修了。在学中、古代の土笛と創作楽器の研究を行う。2014年よりインドネシアの打楽器ガムランを法人に導入。2016年、ガムラングループ「Go On」を結成し、障がいがある利用者の方と共に表現やコミュニケーションの可能性を見出しながら、音楽活動を行っている。香椎宮雅楽保存会、芸工アヴァンギャルド・コンソート、福岡ガムラン倶楽部「LOU」に所属。

磯部久子（シンギング・ボール）
ヒーリングコーディネーター、氣波(Kepa)サウンド演奏家、シンギングボウル波動セラピスト、整体師。心とからだの声を聴き、自分らしく輝けるよう気づきをサポートする。空間の波動と楽器の響きを共鳴させ、良い波動空間を創り出す即興演奏を行う。

比屋根綾子（シンギング・ボール）
九州大学歯学部卒。歯科医師。専門は麻酔。痛みと記憶の研究を経て、音と意識の変容をテーマにしたワークショップを開催。沖縄の神職でもあり、古神道やシャーマニズムについて独自の視点で研究している。

知足美加子（美術）
博士(芸術学)。彫刻家（国画会会員)。山岳修験道学会評議員（英彦山山伏「知足院」の子孫）。中越地震、東日本大震災、熊本震災、九州北部豪雨災害において、アートを通した復興支援活動を行う。2017年より、災害流木のしおりを制作し義援金とする活動や、松末小学校時計づくりワークショップ等を行う。樹齢132年の災害流木で制作した彫刻《朝倉龍》を、朝倉市立杷木小学校に寄贈している。九州大学大学院芸術工学研究院准教授

池田美奈子（広報）
ドイツで美術史を学んでいた時にバウハウスと出会いデザインの道へ。帰国後、東京芸術大学大学院を修了し、同大学助手を務めた後、デザイン誌の編集者となる。独立して、IIDjを共同設立し、情報デザインを中心に活動を展開。2003年より九州大学大学院芸術工学研究院准教授。専門はデザインと情報編集。

藤枝守（芸術監督、作曲）
植物の電位変化データに基づく《植物文様》という作曲シリーズを展開。著書として『響きの考古学』など。CDとしては《ゴシック・ハープの植物文様》や《Patterns of Plants》など多数。最近では「甕の音なひ」(2015)、「織・曼荼羅」(2017)などの舞台作品を手がける。今年(2018)、《台湾茶の植物文様》を発表。また、来年、西山まりえによるCD《ルネサンスの植物文様》がリリース予定。

photo by AT

祈りとは交歓か　　綾杉るな

月が輝く冬至の夜に、
「冬至にうたう阿知女作法～ISOLA2018～」
が催された。

暗いホールの中に一歩踏み込むと、背後から波の音が聞こえてきた。

円筒形の暗い空間はすでに海の中だった。
左右から、また上から波の音が聞こえてくる。

あのワダツミの神の世界へ、海の底へ、
現身（うつしみ）を持ちながら踏み込んでいく、しつらえだった。

床の中央には志賀島が白く映し出されていた。

そこを貫く塩の道。

この日、冬至の太陽はこの塩の道を通って行った。

到達点は沖津宮。

志賀島に重なって満潮の波のたゆたいが映し出されると、自分は浜辺に立っていた。
波の音が上から響くと海の底で揺れている。

観客は音と映像によって、海の底、荒磯の浜辺、そして天空からと多次元の視点を持たされた。
それは肉体の耳ではなく、魂の次元で聞くことを促した。

そこに風の音か、海の中の音か、形を成す前の未分化の精霊の吐息か、土笛が結界を歩む。

それは鳥のさえずりに変わり、あるいは精霊の目覚めの歌なのか、響きを刻々と変えていく。
竪琴が植物の唄う歌を奏でる。

塩の道に対峙して座る二人の人間によって
「あぢめ～　おう～　おう～」
と磯良を呼び出す言霊が唱えられた。

阿知女作法という神楽は宮廷深く1000年以上も前から奏されているという。
冬に天皇の御霊を奮う御神楽として。

その美しいメロディーは魂の記憶を揺さぶる。

磯良の出現を促す御神楽は祈りそのものだ。

「祈り」とは願いではなく、交歓なのかもしれない。

「いのり」という言葉も「い」（神聖）と「のる」（言葉を発する）からできている。

精霊や神に届くのはその世界の音魂や言霊なのだ。

研ぎ澄まされなければ到達できない波動の世界。

いにしえの日本人はそれを良く知っていて、このような御神楽を生み出したのだろう。

「神楽」とは「神が楽しむ」と書く。

笙（しょう）は天上界の音の響きを持つという。

それによって天上界を演じるのではなく、天上界と人間を結ぶ音魂として創造されたのだと、この日理解した。

万葉歌が新しいメロディーを得て歌われた。

海原の　道遠みかも　月読の　光少なき　夜は更けにつつ　巻七　1075

志賀の海人は　め刈り塩焼き　暇なみ　くしらの小櫛　取りもみなくに　巻三　278

志賀の海人の　塩焼く煙　風を疾み　立ちは上らず　山にたなびく　巻七　1246

それは曙光の女神のように
萎えた太陽の新生の寿（ことほ）ぎのように響き渡った。

このような世界を生み出そうとする藤枝守と志賀島。

この鬼才と同じ時代を生きて目撃していくことの不思議を思う。

「ひもろぎ逍遥」（2018年12月23日付）より転載

音響展示「干珠満珠」（制作：藤枝守）

日時：12月23日（11:00-14:30）
場所：九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟ホール
映像：渡辺圭介（anno lab）

「冬至にうたう阿知女作法」のステージには、第1期の志賀島自由大学のチラシのデザインにもなった志賀島の等高線の地図の画像が投影されています。その地図の画像のうえに、沖津宮周辺の海面の映像が重ね合わされていますが、この映像は、干満の差の変化が大きい大潮のときに、実際の潮の流れの変化を数時間にもわたってタイムラプス（コマ撮り）の手法によって収録し、渡辺圭介氏によって編集されたものです。この干満の変化による映像とともに、同じ沖津宮周辺の海面下の潮の流れの変化を数個の水中マイクで収録し、その音響素材による《干珠満珠》と題されたインスタレーション作品が展示されました。まさに、磯良が海から現れたという志賀島・沖津宮周辺の潮の干満が映像と音響によってホール全体に浮かび上がりました。

海面映像収録のためのカメラ設置

海中録音のために沈められた水中マイク

海面映像収録

子どもワークショップ　「海を体で表現しよう」

日時：12月23日（13:00-14:30）
場所：九州大学大橋キャンパス多次元デザイン実験棟ホール
講師：出口容子

音響展示《干珠満珠》のインスタレーション空間で、子どもたちが海を自分の身近な問題として捉え、身体で表現することにチャレンジしたワークショップ。演劇インストラクターの出口容子氏のリードのもと、環境汚染問題をテーマにした寸劇を子どもたちが自分で創作し、発表。人間が出すゴミが海洋生物に悪影響を及ぼすことを危惧するストーリーを、子どもたちが志賀島の干満による音響と映像のなかで表現しました。

海と潮、山と樹の響きを形にする　知足美加子

志賀島にある志賀海神社は「龍の都」とよばれ龍を大切にしてきたところです。龍は水の神様であり、水を治め、波や潮の満ち引きもおこせるといわれています。日本は今、豪雨や台風による災害が増えています。水への祈りをこめて、子供達と砂浜に力をあわせて大きな龍を描くワークショップを企画しました。音叉と波の音に耳をすませながら、志賀島に「海音の龍神様」を招くものです。（前日までの台風の影響を鑑み、残念ながら中止となりました）

志賀海神社のことを学ぶ過程で、古代より「志賀島の砂には強い祓いの力がある」と信じられていることを知りました。神社の入り口には、参拝者用のお清めの砂が置かれていますし、穂高神社（長野県）では、式年遷宮の際わざわざ志賀島から砂を運んで清めるそうです。彼方の土地をつないだのは「船」であり、造船を支えたのは山の樹木です。海に命を預けて生活していた古代の人々は、海にも山にも深い敬意を感じていたことでしょう。志賀島の砂浜に立ち海風をうけていると、それらのイメージが響きとして重なりあい、私の中で形に結ばれました。

2018年12月22日に行われた公演「冬至にうたう『阿知女作法』～ISOLA2018～」において、私は美術を担当しました。「阿知女作法」は志賀島に伝わる神楽歌なので、この海辺の龍のイメージから舞台美術を発想しました。透明な円柱に、塩と杉、山桜の粉を積層しています。塩は「海」、杉は「船」、山桜は「山」として、海と山の繋がりをイメージしました。これらに波の映像が揺らいで、たくさんの龍が飛んでいくようにみえました。

美術でつかった杉の粉は、九州豪雨災害被災地の朝倉から運びました。また、山桜は英彦山の麓にあった樹齢300年の天然記念物で、豪雨災害の際倒木したものです（この倒木で守護童子像を彫刻中）。公演が行われた会場近くにおいても、工事のため桜が伐採されたばかりです。繰り返しよせる海の波、春の度に咲いた桜。本公演の「共創」が、繰り返される自然の営みを再現させ、人間の命のスパンをこえる想像力と救いを与えてくれたことに感謝します。

ワークショップ1
阿知女作法をうたう～沖津宮・海割れ参拝

日時：9月9日（13:30-17:00）
場所：休暇村志賀島「万葉の間」・沖津宮
講師：石川高（雅楽家）
ナビゲーター：比屋根綾子

雅楽家として古代歌謡を現代に伝える石川高氏が、志賀島にゆかりのある神楽歌《阿知女作法》や《千歳》を伝授しました。折口信夫の説を基づき、《阿知女作法》は海の神「阿度部磯良（あどめのいそら）」に呼びかける歌であることが紹介されました。

引き続き、参加者は、「博士」と呼ばれる伝統的な雅楽の楽譜を手に、石川氏の歌唱を模倣しながら、1時間ほどで、独特な抑揚やニュアンスをある程度マスターしました。その後、参加者全員で、潮が引いて海割れの状態となった磯を渡り、沖津宮に参拝し、伝授されたばかりの《阿知女作法》をうたいました。

ワークショップ2
海を聴く～海中レコーディングにチャレンジ！

日時：11月11日（13:00-15:00）
場所：シカシマサイクル、志賀島漁港
講師：岡崎峻

晴天の恵まれた日に志賀島漁港において、水中マイクを使って海の中に広がる音の世界を体感するワークショップを開催しました。水中マイクが取り付けられた釣竿を持って説明会場から出発。漁港の桟橋から海のなかに水中マイクを沈めると「パチパチ、カチカチ」と音が聴こえてきます。「応援しているみたい！」「これ知ってる。僕がお魚だったときに聞いた音！」など、子どもたちの反応も上々でした。その後のレクチャーでは、この「パチパチ」という音の正体は「テッポウエビ」によるものだったことや、水中では空気中よりもはるかに音が伝わりやすいこと、九州・日本近海では同じような生物の音がきこえることなど、海中における音の世界の一端が紹介されました。

ワークショップ3
古代の塩づくり

日時：11月17日（13:00-14:30）
場所：九州大学大橋キャンパス「デザインコモン」
講師：福薗美由紀（福岡市博物館）

万葉集には、志賀島の海人が海藻を刈り取り、焼いて塩を作る「藻塩焼(もしおやき)」の歌が詠まれています。このワークショップでは、古代の藻塩づくりを少しだけ体験する機会となりました。藻塩作りは、海藻を焼いたり、海藻を積み重ねて塩分濃度の濃い海水を作るなど、いろいろな可能性が考えられますが、その製法は、はっきりとわかっていないそうです。今回のワークショップでは、塩分濃度の高い海水をコンロで煮詰めて塩を取る実験や、アオサやひじきでつくった藻塩や岩塩、食塩などの味比べを行いましたが、参加者は異なる塩の香りや色、味の違いや触感に驚いていました。

ワークショップ4
志賀島の古層にふれる～仏閣めぐり

日時：11月24日（13:00-16:00）
場所：荘厳寺、志賀島万葉歌碑ほか
講師：山崎公明（荘厳寺）
ナビゲーター：比屋根綾子

博多湾の玄関口に位置する志賀島には、中国に渡った多くの名僧の足跡が残されています。このワークショップには、鎌倉時代に開山した臨済宗東福寺派の荘厳寺で、山崎住職により志賀島と大陸との歴史的な関係に関するレクチャーや座禅体験が含まれていました。その後、志賀島に点在する万葉歌碑をめぐるツアーへ出発。志賀島にある十の万葉歌碑のうち、二つの歌碑を訪れました。蒙古塚にも立ち寄り、海を通じた他地域との交流・攻防の歴史を学ぶ1日となりました。

レクチャー1
水産学者が読み解く記紀神話
～和邇・鰐の正体～

日時：8月25日（13:00-15:00）
場所：志賀海神社
講師：宮崎照雄（三重大学名誉教授）

記紀神話における海洋民族の記述を、水産学者の視点から読み解くレクチャー。魚の病気の専門家である宮崎照雄氏は、また、理系学者の観点から日本古代史を研究しています。宮崎氏によると、昔は大型の流線型のものをワニと呼んでいたそうです。つまり、記紀神話に出てくる「ワニ」は動物の鰐ではなく、木造の大型船であるという画期的な解釈が紹介されました。古来、日本人が海や海の生物とどのように対峙してきたのか、また、私たちの生活に海がどのように関わってきたのか、これまでの歴史学的な視点とは異なる解釈を知る機会となりました。

【宮崎照雄】1949年三重県生まれ。東京大学大学院農学系水産学修士修了。農学博士(東京大学)。三重大学名誉教授。魚の病気を40年間にわたり教育・研究。著書に『三角縁神獣鏡が映す大和王権』(梓書院)。論文「神武は鯨を見たか？ --神武東征と神武歌謡を考える」が平成27年「邪馬台国全国大会in福岡」において最優秀賞。

photo by AT

photo by AT

レクチャー2
阿知女作法と阿曇族

日時：9月9日（11:00-12:30）
場所：休暇村志賀島「万葉の間」
講師：平澤憲子（志賀海神社権禰宜）
石川高（雅楽家）

平澤憲子氏のレクチャーでは、志賀島を拠点としてきた海の民「阿曇族」がもつ長い歴史と高度な文化をたずさえて全国に広がっていった阿曇族の足跡が紹介されました。また、石川高氏は、宮中の『御神楽』の演目として知られる《阿知女作法》をじっさいに唱えながら解説。この神楽歌が「阿度部磯良（あどめのいそら）」に呼びかける歌として伝えられ、その神楽歌の舞台が志賀島だったという説が紹介されました。

【平澤憲子】志賀海神社社家の阿曇家に生まれる。大学卒業後、外資系IT企業にシステム・エンジニアとして勤務。2009年に兄の前宮司・阿曇磯和氏の急逝により、神職資格を取得し、2012年より志賀海神社に権禰宜として奉職。

photo by AT

photo by AT

志賀島自由大学・レクチャー

レクチャー3
聖地としての志賀島

日時：10月27日（15:00-16:30）
場所：九州大学大橋サテライト「ルネット」
講師：平澤憲子
クロストーク：知足美加子、藤枝守

平澤憲子氏による二回目のレクチャーは、「志賀海神社権禰宜、平澤(安曇)憲子氏が語る祈りの島」という副題をともなったものでしたが、「高天原」や「舞能ヶ浜」といった神話や歴史と深く関わる志賀島の地名や、島の地質学的な特異性が砂の色が異なる赤瀬、黒瀬、白瀬という浜の名前に反映されていることが述べられました。さらに、万葉集には志賀島を歌ったものが23首もあることも紹介され、志賀島の固有性が浮き彫りとなりました。後半のクロストークでは、志賀海神社に伝わる祭事「山ほめ祭」を事例に、海と山とがつながるエコロジカルな思想など、話題が広がりました。

photo by SA

photo by AT

レクチャー4
海と考古学～玄界灘をめぐる人々～

日時：11月17日（15:00-16:30）
場所：九州大学大橋キャンパス「デザインコモン」
講師：森本幹彦（福岡市博物館）

玄界灘沿岸には古くから砂丘が形成されており、発掘調査で原始・古代の遺跡が多く発見されています。このレクチャーでは、弥生時代から古墳時代にかけての博多沿岸の砂丘の実態と、そこに住む人々や海外との交流の模様が紹介されました。福岡市内の遺跡からは、西アジアからのガラス玉や、ゴホウラ貝を加工した貝輪などが出土しているそうで、古くから博多湾沿岸が日本の玄関口として、海を介した活発な交流の場であったことを再認識する機会となりました。

【森本幹彦】1978年奈良県生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科修士終了。2006年福岡市入庁（文化財部埋蔵文化財調査課）、2013年より福岡市博物館学芸課。弥生時代の対外交流などを研究。平成26年企画展示「博物館もよりの砂丘遺跡」、平成27年特別展『新・奴国展～ふくおか創世記～』、平成29年特別展『よみがえれ！鴻臚館～行き交う人々と唐物～』などの展示を担当。

photo by AT

photo by AT

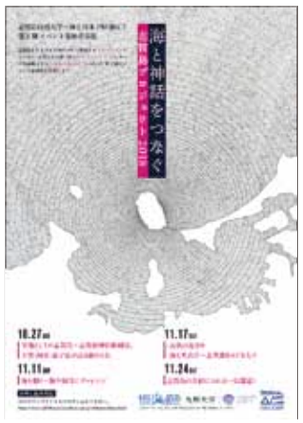
志賀島プロジェクトのビジュアルデザイン　池田美奈子

「海と神話をつなぐ～志賀島プロジェクト2018」の広報のために3種類のビジュアルデザインを制作しました。チラシのグラフィックデザインと言えばそれまでですが、このプロジェクトにおけるビジュアルデザインは、それ以上の意味がありました。

本プロジェクトではデザインが作品制作のプロセスに最初から関与しました。デザインプロセスは、まず五感を解放して、志賀島の地形、潮の干満、地層、天体、神話、海人の話などを体感することから始まりました。これは有史以前、古代から現代に至る時間の中に「現象」として積層された天と地と神と人の営みのアーカイブを読み解く作業です。藤枝守氏が作品の軸に置いた「阿曇磯良」のイメージが、引き潮によって現れる海底の姿と重なった瞬間に、メインとなるビジュアルのイメージが生まれました（裏表紙参照）。さらにそのイメージは、ゴツゴツした海底の姿から、大地の多様な表面が浮き出た地層へ、さらにその地層がアーカイブのメタファーとして次々と展開されていきます。そして地層と海岸線によってかたどられる志賀島の地図上に太陽の運行線をのせることで、天と地に内在する様々な要素が融合した最終的なビジュアルへと収斂していきました。広報用の3種類の印刷物は、一貫してこのイメージを変容させながらデザインしています

意味の重層性を包含する地図のイメージは、作曲家にもインスピレーションを与え、シアターパフォーマンス「ISOLA 2018」の舞台上のメインビジュアルとして採用され、舞台中央の床面に、潮の干満の映像を重ねて投影されました（p18下の写真）。本番では演者たちはこのメインビジュアルを囲み、周囲を移動しながらパフォーマンスが繰り広げられたのです。

アート作品の公演におけるグラフィックは、多くの場合、公演直前にチラシ単独のデザインとして発注されます。しかし、作品制作の構想段階からデザインが深く関与することでひらける可能性ははるかに大きいと考えています。



左：志賀島自由大学Ⅱ期のビジュアル。密な同心円が志賀島の影響力を表現し、かつ海と陸を反転して見せることで、焦点を陸から海へとずらした。
右：同Ⅲ期「ISOLA 2018」のビジュアル。阿曇磯良のイメージを海底の荒々しい岩や海藻とオーバーラップさせ、水の奥から透かせて見せ、あえて白地に白文字を重ねることで、神話と現実の層を表現した。
P18下：「ISOLA 2018」の舞台にプロジェクションされたメインビジュアル。
表4（裏表紙）：志賀島自由大学Ⅰ期のためのビジュアル。志賀島の地図上に地層を象徴する等高線を配した。

デザイン：藤匠汰朗

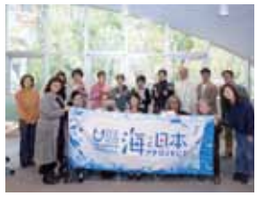
日本財団「海と日本PROJECT」の助成による「志賀島自由大学」

水産学者が読み解く記紀神話

阿知女作法をうたう～沖津宮・海割れ参拝

聖地としての志賀島

海を聴く～海中録音にチャレンジ


古代の塩作り+海と考古学

志賀島の古層にふれる

冬至にうたう阿知女作法～ISOLA2018～

海を体で表現しよう

photo by AT

□主催：九州大学ソーシャルアートラボ　□共催：志賀島文化協会、志賀島自治連合会
□協力：志賀海神社、志賀島ふたば幼稚園、福岡市漁業協同組合志賀島支所、志賀商工会、JA福岡市東部志賀支店、福岡市博物館　□後援：福岡県、福岡市、福岡市文化芸術振興財団、西日本新聞社、RKB毎日放送、LOVE FM　□助成：日本財団「海と日本PROJECT」
撮影：富永亜紀子(AT)、広松ゆか(YH)、阿部新平(SA)

九州大学 | 大学院芸術工学研究院
大学院芸術工学府
芸術工学部

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION　海と日本 PROJECT　SOCIAL ART LAB FACULTY OF DESIGN KYUSHU UNIVERSITY

このイベントは、海と日本 PROJECT の一環で実施しています。